研究旅行要旨

医療と「癒し」の歴史研究
―古代アスクレピオス神崇拝から近世の歴史を辿る―

19AR060 古賀野涼佳

現代日本では、世界トップクラスの医療を受けることができる。私たちは、必要に応じてその都度すぐに医者から処方箋を貰い薬局で薬を処方してもらえるうえに、精密機器によって癌などの重病の早期発見までもできるほどだ。しかし現代、延命などのため、患者が望まない苦痛な治療が行われていることが問題となっている。ここには、治療における身体と心の問題、つまりは医療と「癒し」の問題が存在しているように思う。

本研究旅行は、現代日本における医療の中心となっている西洋医学のルーツを、信仰的側面から調査し、「癒し」の原点を見つめ直すことを目的とした。今回は、古代ヨーロッパ世界において「医学の神」として信仰され、現代もなお医学のシンボルとして崇められている医神アスクレピオスの信仰を中心に、博物館・神殿跡を訪れ調査した。今回得られた情報をもとに、現代日本において見失われつつある医療における「癒し」の原点を浮かび上がらせていく。

2018 年度　国際文化学部　研究旅行奨励制度　報告書

医療と「癒し」の歴史研究

―古代アスクレピオス神崇拝から近世の歴史を辿る―

19AR060 古賀野涼佳

―研究調査地―

イタリア(ローマ・ヴェネツィア・フィレンツェ)

―研究目的―

現代日本では、世界トップクラスの医療を受けることができる。しかし、病院や医者に「病気を見て人を見ず」といった批判の言葉がある。これは、医者は患者の病気を治すことだけを目的としてしまい、患者の気持ちや精神的なケアを怠ってしまっているということが起こっているからだそうだ。ここには、治療における身体と心の問題、つまり医療と精神的な「癒し」の問題が存在しているように思う。そもそも、人の「癒し」とは何だろうか。

「医学の神」と言われているギリシア神話の神アスクレピオスは、古くから治療回復を願う人々に信仰され、アスクレピオスを祀った神殿は、地中海沿い各地に点在していた。人々はこの神殿に通い、お供え物をして祈願し、病が治るとお礼参りにまた足を運んだ。このような、アスクレピオスへの祈りなどの占術を中心とした信仰こそが人々にとって精神的な「癒し」であったとされている。これが中世になると、キリスト教の教会や信者による聖人への祈りや「癒し」に代わった。そしてその後、貧者や病人のための慈善施設としての「癒しの場」が誕生した。ここでは、簡単な治療や手当てだけでなく、食事や入浴などもでき、病院のはじまりだとされている。かつて、ローマの街なかを流れるテヴェレ川の中州にアスクレピオス神殿があったが、中世になると、キリスト教団体によって病院が建設され、現在でも病院としての機能を果たしているそうだ。ラテン語の hospes(歓迎・もてなし)を語源とする英語の hospital の意味を辞書で引くと、第一義に「病院」という意味が出てくるが、その第二義に「キリスト教の慈善施設」と出てくる。この由来はここからだと言われている。また、イタリアには古代の神殿や中世の病院だけでなく、世界で初めて医学的人体解剖が行われた解剖室や世界最古の薬局などの博物館も解放されている。ここでは高度な医術だけでなく、当時の人々が治療・投薬を行う上で感じたであろう医療に対する恐怖への「癒し」の治療も重要とされていただろう。また、精神病院や捨て子療育園などの治療をするうえで「癒し」のが不可欠な施設の博物館も存在している。

ローマを中心とした医学的な博物館や歴史的な病院に足を運ぶことによって、発掘された神殿のお供え物や古代の素朴な医療機器から近世の科学的な医療機器まで、そして医療技術の発展に伴うそれぞれの時代における「癒し」の在り方について調査できる。そしてそこから、本来発達した医療・医学の目的であるはずの原点としての「癒し」を見つめなおしたい。それがこの研究旅行の目的である。

―期待される効果―

現代日本における医学とは西洋医学であるため、イタリアにおける古代・中世の素朴な医療と信仰的な「癒し」から、近世の科学的な医療と「癒し」を現地で視覚的に調査することによって、現代日本人にとって当たり前となってしまっている病院での高度な医療・

投薬について、その原点である「癒し」を見つめなおす契機となる。また、現地でしか入手できない文献や資料を集めることによって、卒業論文に向けて充実した準備を行うことができる。

―研究旅行実施日程―

	滞在地	行動・調査内容
8月20日	福岡→香港→ ローマ	航空機移動
8月21日	ローマ	**テヴェレ川の中州・ティベリーナ島での調査** →アスクレピオス神殿の遺構である病院と教会の調査
8月22日	ローマ→ ヴェネツィア	移動(鉄道)
8月23日	ヴェネツィア	**サン・セルヴォロ精神病院(軍事病院)博物館での調査** →病院での治療方法等に関する資料・文献収集
8月24日	ヴェネツィア→ ボローニャ→ フィレンツェ	移動(鉄道) **ボローニャ大学人体解剖室(アルキジンナージオ宮)での調査** →世界で初めて行われた医学的人体解剖に関する資料・文献収集 移動(鉄道)
8月25日	フィレンツェ	**捨て子療育園博物館での調査** →当時の、子どもたちの施設での生活について調査
8月26日	フィレンツェ→ ローマ	**サンタマリアノヴェッラ薬局の博物館での調査** →当時の薬の役割や価値、投薬方法等について資料収集 移動(鉄道)
8月27日	ローマ	**ローマ・ラサピエンツァ大学医学史博物館での調査** →アスクレピオス神殿からの発掘品の調査
8月28日	ローマ	**ローマ国立博物館(マッシモ宮,ディオクレティアヌス帝浴場跡)** →神殿からの発掘出土品に関する資料・文献収集
8月29日	ローマ→香港	航空機移動
8月30日	福岡	帰国

第一章　古代医療と信仰的な「癒し」―アスクレピオス信仰―

古代ヨーロッパにおいて「医学の神」として崇拝されていた医神アスクレピオス。彼は古代においてどのような存在であり、人々はどのような信仰を行っていたのか。アスクレピオス信仰から見られる人々の「癒し」とはどのようなものであったのか。以下に、アスクレピオスに関する記述と、現地での調査を報告する。

医神アスクレピオス

ギリシア神話に登場する医神アスクレピオスは、医術を司る神アポロンと、ギリシア北部ラピテス族の人間の王女コロニスとの子である。アスクレピオスは、優れた賢者で有名なケンタウロスのケイロンに育てられ、天才的な医師へと成長した。彼は生きている間は高名な「医師」として人々に崇められ、死んでから初めて「神」として祀られた。カール・ケレーニイは著書『医神アスクレピオス』(白水社, 1997 年, 44 頁, 岡田素之訳)のなかで、「治癒が生じるためには、医師の関与のほかに、つまり外部からの処置と同時に、さらに病人の内部に生じる何か別種のものがいつも手を貸しているはずだ」と述べている。また、キリスト教の民間信仰は、このような出来事を、いつも聖者が行う執り成し、神の特別な恩寵に授かる人物の執り成しだとみなしているそうだ。つまりこの信仰によると、治療における根本的な核は、信仰そのものであり、神であるということだ。

エピダウロスでの治療

彼が誕生したのはギリシアのエピダウロスとされている。最初に彼の神殿が建てられたのもエピダウロスであり、エピダウロスで行われていた治療は銘板によって残されている。それらの残されていた銘板によると、アスクレピオス神殿での治療は神殿の中で眠ることによって、治療者の夢の中に聖なる動物やアスクレピオス自身が現れ処置をするような、宗教的体験であったことが分かっている。つまり、神的なものとの対面こそが病状を好転させる道であったのだ。また、神殿には瀕死の病人を連れてくることはできなかったそうだ。これは、アスクレピオスが死者の蘇生を行ったことにより罰を受けたことが理由であるという見解がある。

アスクレピオスのローマ到来

紀元前 293 年、ローマはペストに襲われた。当時、アスクレピオスはローマで既に「治療の神」として知られており、アスクレピオスをローマに連れてくるために、男たちがエピダウロスへ派遣された。エピダウロスの人々にとって、アスクレピオスはエピダウロスの神殿に鎮座するものであり、神の祭祀の末社が設けられるところならどこでもその神威が発揮されるものであった。そのためアスクレピオスは、その姿を蛇と変え、テヴェレ川を渡ってローマのティベリーナ島に到来した。このアスクレピオスの蛇がローマに到達すると、大流行していたペストはたちまち収まり、その神秘的な出来事の偉業と感謝の気持

ちからアスクレピオス神殿が建設され、人々はアスクレピオスを深く崇拝するようになった。

―研究報告―

◎ローマ・ティベリーナ島(ファーテベネフラテッリ病院,聖バルトロメオ教会)

ローマのテヴェレ川の中洲に、全長 270 メートル、最大幅 67 メートルの小さな島が存在している。紀元前 3 世紀、この島の東側にアスクレピオスの神殿は存在しており、古代の人々は病気回復を願い、お供え物を持って神殿に訪れ懇願していた。現在、神殿があったとされている場所には聖バルトロメオ教会が建っており、この教会内部の柱は、神殿の遺構として残っている。また、通常教会にはない井戸の一部も神殿の遺構として残っている。

写真 1 聖バルトロメオ教会 撮影者：筆者

この井戸は、神殿に訪れた人々が、身体を清める際に使われていたとされている。現在、教会は一般に開放されておらず、その中に足を踏み入れることはできなかった。この教会から出入りしている人も筆者が見た限りでは見られなかった。

そしてこの教会の向かい側には、ファーテベネフラッテリ病院がある。この病院は 16 世紀中ばに建てられ、現在も病院としての機能を果たしている。

写真 2 ファーテベネフラッテリ病院 撮影者：筆者

かつてアスクレピオス神殿が存在したこの島にあるこの病院は、人々にとってまさに「癒し」の場所であるのだろう。病院の中に足を踏み入れると、多くの妊婦を目にすることができた。病院内には、飲食物や雑誌を買うことができる売店はもちろん、カフェやメ

ガネ・サングラスを売っている店もあった。診察室はフロアの中央にあり、その周りを椅子が囲み、妊婦を中心とした女性が多く座っていた。天井はガラス張りとなっており、自然光が上から差し込み患者、そして診察室にまで自然光が行き届く。診察フロアから少し奥に進むと、中庭があり中庭の中心には水槽があった。この場所は、患者だけでなく医者も椅子に腰かけ読書や談笑をしており、この場所にいるすべての人々にとって「癒し」の場所となっていることが連想される。

◎ローマ・ラサピエンツァ大学 医学史博物館

ローマ・テルミニ駅から約徒歩 10 分、ローマ・ラサピエンツァ大学の敷地内に医学史博物館が存在する。歩道に面しているため、大学内の門をくぐらずとも博物館の中に入ることができる。この博物館は、1938 年に建てられ、医療の歴史を幅広く展示している。三階構造となっており、一階は過去の医学的な作法を想起させるようなジオラマが展示されており、二階は古代から 17 世紀に革命が起こるまでの医療の発達がわかる展示がされている。三階は科学的な医療の出現までの過程の展示がされている。この博物館の二階に、アスクレピオスに関する展示があり、ここを中心に閲覧した。

アスクレピオスにおいて、「蛇」はとても重要なシンボルとなっている。アスクレピオスは、医神の象徴として一匹の蛇が巻き付いた杖を持っている。また、古代の人々にとって、脱皮をした蛇は生命再生の象徴であったそうで、その考えは現代でも受け継がれ、兵の巻き付いた「アスクレピオスの蛇」は WHO(世界保健機関)のシンボルとなっている[1]。この博物館で閲覧した資料によると、「アスクレピオスの蛇」が医療のシンボルとなっているのは、その蛇の唾液が治療の質を高めていたからだそうだ。

写真 3 医神アスクレピオス像 撮影者：筆者

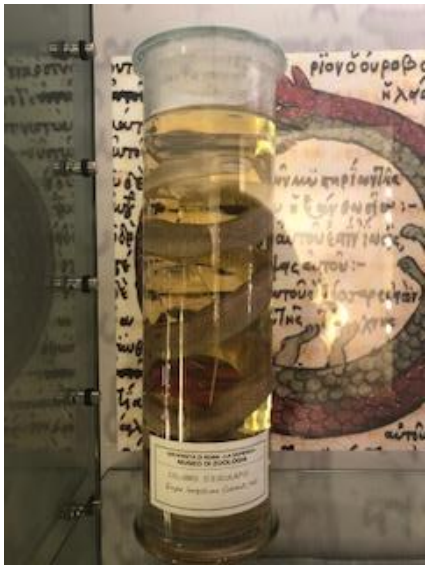

写真 4 アスクレピオスの蛇 撮影者：筆者

[1] 庄子大亮『世界を読み解くためのギリシア・ローマ神話入門』、河出書房新社、2016 年、123 頁参照。

アスクレピオス神殿に訪れた人々の参拝の仕方についての展示があり、その方法を発掘物とともに拝見することができた。その展示から得られた情報を以下に報告する。

古代ギリシアと古代ローマにおいて、人々はアスクレピオス神に食べ物や飲み物、そして治したい部分を解剖したものをテラコッタで表現した「エクスボート」を捧げていた。これらはたいてい神と同じ部屋におかれていた。エクスボートは、もう使われていない深い円筒状の井戸や神殿の周りからたくさん発掘されている。エクスボートは足や顔のパーツの一部、手や性器などその種類は様々であり、人々は治したい体の一部のエクスボートを神に捧げた。また、子宮や胸のエクスボートを捧げると子に恵まれるとされていた。エクスボートは現在もほぼ形を変えることなく残っている。

写真 5 足のエクスボート
撮影者：筆者

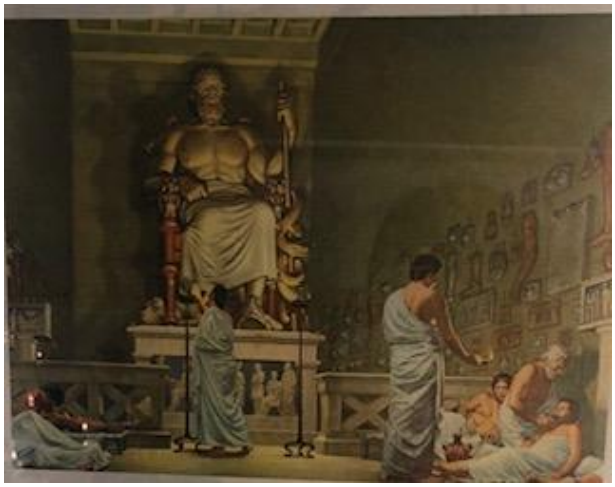

写真 6 アスクレピオス神殿の神部屋
撮影者：筆者

写真 6 は、神の部屋と神殿に治療にきた人々である。この図を見ると、神の前で横たわっている人々が目に付く。前述したように、アスクレピオス神殿では神殿で眠るという行為そのものが回復への道だった。また、アスクレピオス像の前にいる男性が、アスクレピオスの足を触っているのが分かる。神自体に「触る」という行為も、人々が回復への道として行っていた行為だと考えることができる。そして壁に飾られている数々のものは、エ

クスボートのように思われる。これらがエクスボートであるかどうかはわからないが、この神の部屋で、治療者同士が励まし合い、神を信じ、回復を願い眠りについたのだろう

写真 7 現在のティベリーナ島と
ファーテベネフラテッリ病院
撮影者：筆者

写真 8 古代のティベリーナ島と
アスクレピオス神殿
撮影者：筆者

以上、古代アスクレピオス信仰に関する調査報告である。人々にとって、アスクレピオスを信仰し、神殿に足を運ぶこと自体が「医療」であるとともに「癒し」でもあったと考えられる。外科的な治療に頼ることよりも、治療回復を切に願い神を信じることこそが、古代の人々にとっての「医療」であったと考える。

第二章　中世の医療と「癒し」

中世に入ると、ヨーロッパにはキリスト教が到来し、各地に医学校が開園され医学を「学問」として学ぶものが増えた。従って、信仰的で医術的には素朴で会った古代に比べると、人体の解剖実験が行われるようになったり、療法の種類も増えた。そういった医学の進歩のなかで人々はどのようにして治療と向き合ってきたのだろうか。中世の医療の中でも、人々の「癒し」に深く関わっていたであろう施設の調査を行った。以下に調査報告をする。

◎旧ボローニャ大学　アルキジンナージオ宮人体解剖室

1563 年、アルキジンナージオ宮は常任理事のための部屋としてボローニャ大学に建設さ

れた。人人体解剖室は 1637 年に建設され、世界で初めて人体解剖を行った場所として知られているが、第二次世界大戦時に空爆にあいこの部屋は焼失し、現在はほとんどが作り替えられている。ボローニャの有名な医者であるアポロンの像をはじめ、数々の有名な医者の像がこの解剖室を取り囲んでいる。

解剖は人体が腐敗しないように夏季には行われず、冬季に行われていた。教室は中央に解剖台が置かれ、その周りを階段状の観覧席が取り囲んでおり、この解剖を見学する者たちはどの席に座ってもしっかりと解剖を目にすることができる造りである。

左↑写真 9 アルキジンナージオ宮人体解剖室 撮影者：筆者
右↑写真 10 人体解剖室の天井 撮影者：筆者

◎捨て子療育園博物館

フィレンツェ・サンタマリアノヴェッラ駅から徒歩約 15 分、アカデミア美術館の近くに捨て子療育園博物館がある。1419 年、病人とだけでなく外国人と巡礼者、乞食のための簡易宿泊施設として病院が建設された。そして 1445 年、貧しくて病んでおり捨てられていた女の子の赤子を受け入れ、1484 年までに約 600 人もの赤子,子どもを受け入れた。捨てられた子どもの約半数以上が女の子だった。それから 19 世紀までそのような孤児院としての病院の形態を取り続けた。

写真 11 は、赤ちゃんポストである。自分の子どもを育てられなくなった母親たちは、この鉄門で覆われた新生児が入るのに充分な大きさの窓から病院へと赤子を受け渡していた。この時、赤子は布に包まれ、母親からの手紙や片割れのネックレスやブレスレット、銀貨や銅貨などのプレゼントを一緒に添えられて捨てられていた。この赤ちゃんポストが 1419 年に建設されてから約 600 年間、このポストは使われていた。

写真 11 捨て子療育院博物館の赤ちゃんポスト
撮影者：筆者

写真 12 は捨てられた赤子に添えられていたメダルである。このメダルを見ると、メダルの右半分下が欠けているのが分かる。こうした欠けているメダルや硬貨はたくさん赤子たちに添えられており、欠けたメダルや硬貨の片割れは母親が持っていた。

写真 12 赤子に添えられたメダル 撮影者：筆者

19 世紀の捨て子たちは、病院に所属する乳母に育てられ、乳母たちはそれぞれ２人の赤子を育てた。赤子を育てる部屋のベッドと揺りかごは、乳母たちの好きなようにアレンジされていた。乳母たちのための休憩室もあった。乳母のほとんどが結婚しておらず、1863 年にこの病院の中に建設された助産院で生まれた人たちだった。赤子の医務室もあり、看護婦は乳母が赤子にご飯を与える際に立ち会っていた。看護婦は、ご飯を食べた後の赤子の面倒を見て病棟を清潔にしていた。

「捨て子」というと、親から愛をもらえない子どもというイメージが強いが、この捨て子療育院博物館に展示されていた数々の母親から子どもへのプレゼントや捨てられていた際のエピソード、さらには療育院での生き生きとした子どもたちの生活は愛に溢れ豊かな生活であったことが考えられる。

◎サンタマリアノヴェッラ薬局

フィレンツェ・サンタマリアノヴェッラ駅から徒歩約 10 分、世界最古の薬局としてサンタマリアノヴェッラ薬局が存在する。この薬局のはじまりは 1221 年、フィレンツェに到来したドメニコ修道士たちによって誕生した。当初は修道院内の小さな医務室で使用する薬や香油などの調合に必要だった薬草の栽培を畑でしており、修道士のための薬局のような施設だった。しかしその名声が広まり、1612 年遂に「薬局」として一般の人々にもその門を開いた。

写真 13 サンタマリアノヴェッラ薬局最初の部屋
撮影者：筆者

写真 13 が当時の薬局の部屋であり、現在も精神安定剤やリキュールなど当時から販売していたものを販売している。ここで販売しているもので「7 人の盗賊」という芳香酢があり、これはペストが流行した際、ペストで死んだ死体からアクセサリーなどの貴重品を盗む際に自分の体に塗る薬として使われていた。ベースはお酢で作られており、強い香り

がする。この薬を塗るとペストが移らないと言われていた。また、ダヴィンチが発明したハーブを抽出する道具を使って、ミントとバルサミータ、シナモンを使って作ったキャンディはヒステリックになった精神を落ち着かせるものとして、薬局開設当時から現在まで販売されている。

写真 14 は、薬局が一般に公開されるようになった 1600 年代に売られていた薬の瓶、そして使われていた薬を調合する道具である。すり鉢を使って薬を調合していたことがわかる。

←写真 14 1600 年代に使われていた道具 撮影者：筆者

写真 15 ダヴィンチが発明したハーブを抽出する道具 撮影者：筆者

写真 16 奥はリキュールであり、1600 年代は出産をした妊婦の産後のケアとして飲まれていた。出産で疲弊した体の疲れを取る作用があると言われ、チョコレートやローズ、アルケルメスなど味も豊富である。現在もこれらのリキュールは販売されているが、産後のケアとしては飲まれておらず、お菓子作りの着色料や単純に飲む用として販売されている。

写真 16 リキュール 撮影者：筆者

写真 17 はハーブを粉末にする機械であり、1800 年代において使われていた。写真下にある鉢入っているものがアイリスの球根であり、粉末にするとスクラブのパウダーとな

る。これは、おしろいやホワイトニングを目的とする歯磨き粉に使われていた。

↑写真 17 ハーブを粉末にする機械 撮影者：筆者
→写真 18 石鹸を鋳造する機械 撮影者：筆者

写真 18 は石鹸を鋳造する機械で、1900 年代頭に使われていた。サンタマリアノヴェッラ薬局の石鹸は 1900 年代からと最近から販売されている商品であるが、アーモンドやアボカドなどの天然素材を使った石鹸は、肌に優しくその香りはリラックス効果もあると多くの人々を「癒し」へと導く商品となっている。

昔は「薬」として使用されていたものは、現代では昔ほど効果がないとされているものがほとんどである。しかし、効果がなくなった今でも目的を変えて人々に愛され使用されているものが多く、イタリアのみならず世界中で愛されている。

以上、中世における医療と「癒し」の調査報告である。旧ボローニャ大学において世界初の人体解剖が行われるなど、現代の医学においては必要不可欠となっている「手術」への大変大きな進歩があった一方で、修道士たちの間で高名であった薬局が市民に向けて開くなど、進んでいる医療に対して進んだアフターケアが提供されていたと考えられる。臭いでリフレッシュしたりお酒を飲んでケアしたりと、現代に比べるとやはり素朴であるが、その素朴なケアこそが現代の「癒し」に深く繋がっているからこそ、現在でも多くの人々に愛されているのだろう。

第三章 近世医療と「癒し」

近世の医療は、現代の医療と比べる上で最も近いものであり、特にヨーロッパにおいては、日本よりも発達した医療が発達していた。今回は発達した近世の医療ではなく、発達している医療の中でどのような精神的な医療が行われていたのか、精神病院の博物館に訪れ調査した。そのような中で行われていた「癒し」の治療は、外科的な治療と同じように医術的に発達した治療であったのだろうか。以下、調査を報告する。

◎サン・セルヴォロ島 精神病院博物館

ヴェネツィア本島から水上バスで約 10 分行ったところにサン・セルヴォロ島という離島がある。9 世紀初め、小さな教会と修道院がこの島に建設された。修道院は、ベネディクト会の修道女がマラモッコから来た 12 世紀初めまで修道院としての機能を果たした。1716 年、精神的に病んだ海軍軍人たちのために軍事病院が建設された。博物館の資料異よるとこの病院を建設した修道会は、ローマ・ティベリーナ島のファーテベネフラッテリ病院を建設した修道会と同じである。彼らはヨーロッパで病人と狂った患者たちに医療的な援助を行い、病院建設当初約 60 人もの軍人が病院へ送りこまれた。軍事病院で薬剤師や外科医などの医者として働いた人たちは、陸軍と海軍だけでなく市民の少し狂った人々を患者として治療した。その中には、崇高な人々も多かった。

18 世紀初め、ナポレオンの支配がはじまるとこの軍事病院は、軍事病院から「精神病院」として公共の病院となった。しかし、1978 年にバザリア法が施行されると、病院は閉鎖された。

1871 年、水泡薬のような薬を作り始め、浄化薬や吐剤などの乏しい抗てんかん薬を使った療法を行っていた。1953 年、抗精神病薬が療法に取り入れられ、精神科医が取り扱っていた薬はもっとも鎮静剤のような効果を及ぼすものが多かった。

写真 19 は、精神病院内の旧薬房である。ここで様々な薬が作られ、患者が服用していた。薬房をとり囲んでいる棚の中に入っている瓶には患者の名前が書いてあり、それぞれに必要な薬が仕分けられていた。薬房の中央にはすり鉢や天秤が残されており、ここで薬が調合されていたことがわかる。

←写真 19 旧薬房 撮影者：筆者

↑写真 20 旧薬房の棚 撮影者：筆者

↑写真 21 旧薬房中央机のすり鉢とフラスコと天秤　撮影者：筆者

また、棚の下にはフラスコなどの薬を調合するための道具が保管されている。

写真 22 は、電気療法に使われた導線をぐるぐる巻きにしたものである。19 世紀後半から 20 世紀までこの療法は行われていた。電磁誘導の電流が理学療法医によってこの療法で“ナーバス”な状態や鬱や何かに熱狂的な人、人と関わるのに問題がある人などの精神病質を持った人々に利用されていた。

写真 22 電気療法に使われていた道具　撮影者：筆者

写真 23 電気療法を行っている図 撮影者：筆者

写真 23 は、この電気療法を行っている患者の図である。患者は上半身裸となり、足を機械に乗せているのがわかる。現在では考えられない療法だが、20 世紀初めというそう昔ではない頃まで行われていた。体に電流を通すことによって患者の気を一時的に飛ばし、狂った患者の精神を落ち着かせていたのだろう。

↓写真 24 音楽療法に使われていたオルガン 撮影者：筆者

写真 24 は、音楽療法で使われていたオルガンである。この療法は主に道徳的な治療として、19 世紀前半からフランス・パリのサルペトリエール学校から始まった療法である。チェザーレ・ヴィーニャがこの療法に目をつけ、精神病院に導入された。彼のいくつかの書物によると、音楽と精神と道徳は深い関係があるというそうだ。彼によると、道徳と精神的なものは、音楽に影響を受ける。音楽は精神を整える上で大変重要な役割を果たしている。

音楽は、現代誰もがいつでもどこでも触れることができる身近なものである。眠りにつけない時はクラシック音楽を聴く、元気になりたいときはポップな音楽を聴く、悲しいときは自分の心情を表している音楽を聴く、もしくは励まされるような音楽を聴くなど、その在り方は人によって様々である。しかし、音楽は誰にとっても自分の心に寄り添い「癒し」を与えてくれるものだろう。音楽を使っての治療は、当時の患者たちにとって治療そのものが「癒し」の時間であったと考えられる。

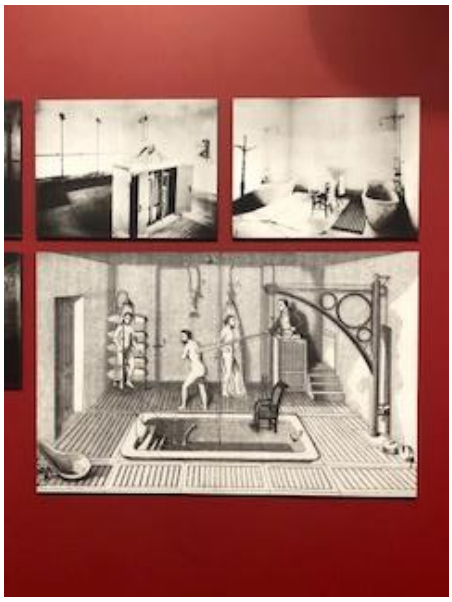

写真 25 はシャワーと浴槽を使った水力電気療法である。患者たちのなかでも特に重症的に病んだ患者たちに対して行われていた。浴槽には 30℃から 35℃のお湯を張り、10℃から 15℃の冷たい水の非常に水圧の強いシャワーを頭から浴びさせた。浴槽は木製もしくは金属でできたものを使っていた。シャワーを浴びる部屋と浴槽に入る部屋は別であり、患者たちは浴槽に 12 時間という長い時間入らなければならなかったそうだ。

写真 25 水力電気療法の図 撮影者：筆者

この風呂を使った水力電気療法中の患者の写真が展示してあった。患者は歯を見せて満面の笑みで浴槽に入っていた。風呂は現代の人にとっても疲れをとりリラックスできるものと同じように、当時の患者たちにとってもリラックスできる「癒し」の空間であったと考えられる。

以上、近世における医療と「癒し」の調査報告である。電気療法のように機械的で発達した精神治療がある一方で、音楽療法や水力電気療法など、単純でリラックスして行える治療もあった。近世における「癒し」の治療は、病院で行う完全な療法ではあるけども、身と心を安らかにして治療を行っていたのではないだろうか。

◎ローマ国立博物館

ローマ・テルミニ駅から徒歩約 3 分、古代ローマの発掘品や美術品を多く展示したローマ国立博物館のマッシモ宮がある。本来、この博物館でアスクレピオス神殿からの出土品を調査するよていだったが、博物館にアスクレピオス神殿からの出土品は見当たらなかった。このような事態も予め予測していたが、出国前にローマ国立博物館についてもっと事前調査をするべきであり、準備不足であった。

まとめ

今回調査対象とした医療と「癒し」の関係は、古代においては信仰こそが医療かつ「癒し」であり、中世においては発達してきた医療の中で精神への薬などの発達した「癒し」であったと考えられる。そして近世では、苦痛さが見受けられないようなリラックスした精神治療が行われていたという見解ができる。現代日本において、体を治すばかりで精神的な治療は自分でどうにかしなければならないというケースが多い。しかし本来、医療と「癒し」は対等であり、その関係は 2 つで 1 つであったのだ。医療だけが発達をし続け、

「癒し」が医療の進歩に追いついていないということが現状である。「癒し」にも重点を置くことは、さらなる医療の発達に繋がるのではないだろうか。

＜参考文献＞

梶田昭『医学の歴史』, 講談社, 2003 年.
カール・ケレーニイ『医神アスクレピオス』（岡田素之訳）, 白水社, 1997 年.
草野巧『ギリシア神話―― 神・英雄録』, 新紀元社, 1995 年.
庄子大亮『世界を読み解くためのギリシア・ローマ神話入門』, 河出書房新社, 2016 年.
吉田敦彦『ギリシア神話と人間』, 青土社, 2016 年.
リチャード・ウォフ『古代の神と王の小事典 1――ギリシア・ローマの神々』（細井敦子訳）, 学芸書林, 2010 年.